

幼児期における他者の認識内容への推測の発達に関する研究

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
小林 里帆

本研究では、①幼児の心の理論課題及び理由づけ質問に関する発達的特徴と②ストーリーの状況が変化した場合（変形課題）における反応の変化という2点について検討し、幼児がどのように他者の認識内容を推測していくのかを明らかにすることを目的とした。心の理論課題は、ニュートラル課題（従来の誤信念課題）と変形課題（ニュートラル課題に消失変形条件あるいは分割変形条件を追加した課題）の2種類を使用した。消失変形条件とは、従来の課題では移動のみである対象Oが消失し、分割変形条件とは、対象Oが2つの場所に分かれて移動するという条件である。

その結果、加齢に伴い心の理論課題に正答し、理由づけ質問も的確に言語化できるようになることが明らかになった。しかし、心の理論課題に誤答し理由づけ質問も的確な言語化ができないレベルから双方ができるレベルへと飛躍することや心の理論課題は誤答であるが、理由づけ質問に対しては的確な言語化ができるレベル（以下、象限Ⅲ）があることが示された。このような結果から、心の理論課題及び理由づけ質問についてそれぞれ「他者の認識内容の推測」及び「推測の言語化」と解釈すると、他者の認識内容の推測と推測の言語化には発達の多様性があることが示唆された。

象限Ⅲについては、2つの解釈がなされた。1つ目は、心の理論課題と理由づけ質問の関係について、これらは独立した課題及び質問であるという解釈である。この解釈に基づけば、「他者の認識内容の推測」に正答することが「推測の言語化」の前提とはならず、どちらが先にできるようになってもおかしくないこととなる。2つ目は、実験操作上の問題から生じた反応だとする解釈である。本研究では、理由づけ質問を心の理論課題の正答を見せた後に行っている。そのため、他者の認識内容を推測し行動を予測することはできないが、提示された行動から他者の認識内容を推測し言語化することができた幼児が存在したと捉えられる。2つの解釈のどちらが正しいかは、今後の検討課題とされた。

理由づけ質問の回答では、加齢に伴い主人公の知覚経験や最初の行為、時間的標識の言及が増加する等の発達的特徴が明らかになった。さらに、3、4歳の幼児の場合、理由づけ質問に的確に回答できないことが多かった。しかし同じ誤答でも、3歳では「現在の場所や行為」への言及が多いが、4歳になると「着目すべき出来事」への言及が可能になるといった違いがあることが明らかになった。また、変形課題における反応の変化はなかった。

このように、本研究では、心の理論課題と理由づけ質問を行うことで、幼児期における他者の認識内容への推測の発達の多様性を見出した。また、年齢によって推測を言語化する際の言及する内容の違いを明らかにした。そして、これらの特徴は他者の認識内容を推測する状況が変化しても（変形課題）、共通していることが明らかになった。